

目録 研究所だより

相良 孝雄

「協同組合にこだわる」。最近、それを特に意識することがあった。ある研究会で、「協同組合や労働とはなにか」を考える機会が少なくなっているとの話があった。大学では「NPO論」を開講している学校は多くなっているが、「協同組合論」や「労働組合論」の授業が少なくなっているとの話であった。一方、現在、私が講師として、「地域福祉」の授業をしている保育専門学校の学生からは、「実際の(保育園、児童館、学童クラブ)現場を見たい」との話があがり、実際に現場に行く中で、目を輝かせながら、現場で働く仲間やリーダーに質問する場面があった。

「協同組合にこだわる」と考えたときに、私の関心として「協同組合で働くことにこだわる」「協同組合を知らせることにこだわる」「協同組合の社会的価値や意味にこだわる」「協同組合の人材戦略と事業運動の継続性にこだわる」などがある。その中でも、「協同組合で働くことにこだわる」ことが一番、今の協同組合人にとって必要ではないかと考えている。

先程の専門学校のように、協同組合の理念や原則が、現場でどのように発展して、実践されているのかは、人の成長や変化、葛藤が琴線に触れ、学生も含め、多くの人に感動を与えるものであると感じている。今年の7月、11月に韓国から「韓国労働者協同組合連合会準備会」と「韓国自活センター協会」の方が来日し、日本労協連に訪

問に来た。交流をする中で、「韓国は2012年に協同組合基本法は成立したが、まだ協同組合の実態ができていない。日本はワーカーズ協同組合法(仮称)は成立していないが、現場の実践が地域社会の中で進んでいる」との話があった。このような話を聞く中で、働いている仲間自身が労働者協同組合で定める「7つの原則」と「3つの協同(利用者との協同・地域との協同・働くもの同士の協同)」にどれだけ手ごたえを感じて、協同組合が貧困・失業・差別などの社会的課題を主体的に協同の力で解決する組織として、協同組合人として自覚しているかが、今後の協同組合の発展には不可欠であると感じた。

私自身9年間、事業所や事業本部で、働くものが変化・成長し、利用者とともに現場をつくり、地域が変わっていく姿を実践を通じて感じる事ができた。そして9月に協同総合研究所に異動した。この研究所の役割は「新しい福祉社会を創造する、協同労働に基づく社会連帯の知的創造センター」として位置付けているが、現場、事業所、事業本部の葛藤や奮闘に絶えずフォーカスを当て、協同組合人として働く仲間の成長・変化にこだわりきる姿勢を「研究会」や「協同の発見誌」などで伝えたい。実践者と研究者をつなぎ、市民が主体となり、「働くこと」と「仕事おこし」を中心とした、日本の協同組合運動・事業の社会的価値を追求する研究所として邁進したい。